

比企交響楽団

第20回 定期演奏会

9/28

日

2025

ドヴォルザーク: 序曲「自然の中で」

ブラームス: ハイドンの主題による変奏曲

ドヴォルザーク: 交響曲第9番「新世界より」

期日: 2025年9月28日

開場: 13:30 開演: 14:00

会場: 東松山市民文化センター

指揮: 高橋 健介



●入場料:

1,000円 (全席自由)

※高校生以下無料

●プレイガイド:

東松山市民文化センター

[窓口・web] (0493) 24-2011

文林堂本店 (0493) 22-0108

●お問合せ・直接購入窓口:

佐藤 (0493) 35-1001

古田 (090) 6135-8014

●主催: 比企交響楽団

●共催: 東松山市教育委員会

●後援: 東松山市 東松山文化まちづくり公社

川島町教育委員会 ときがわ町教育委員会

滑川町教育委員会 鳩山町教育委員会

吉見町教育委員会 嵐山町教育委員会

小川町教育委員会

●協賛: 埼玉県芸術文化祭 2025

 東松山芸術文化交流 2025



比企交響楽団第20回定期演奏会

●演奏曲目：

- ドヴォルザーク：序曲「自然の中で」
- ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲
- ドヴォルザーク：交響曲第9番「新世界より」

●指揮：高橋 健介

●期日：2025年9月28日(日)

●開場：13:30 ●開演：14:00

●会場：東松山市民文化センターホール

●入場料：一般 1000円(全席自由) ※高校生以下無料

●プレイガイド：

東松山市民文化センター [窓口・web] (0493)24-2011、
文林堂本店 (0493)22-0108

●お問い合わせ・直接購入窓口：

佐藤 0493-35-1001 古田 090-6135-8014

●主催：比企交響楽団

●共催：東松山市教育委員会、

●後援：東松山市 東松山文化まちづくり公社

川島町教育委員会 としがわ町教育委員会

滑川町教育委員会 鳩山町教育委員会 吉見町教育委員会

嵐山町教育委員会 小川町教育委員会

●協賛：埼玉県芸術文化祭 2025

●指揮者略歴：高橋 健介

(TAKAHASHI, Kensuke)

埼玉県立大宮光陵高校音楽科ピアノ専攻卒業。東京藝術大学楽理科を首席で卒業。同大学大学院音楽研究科音楽学専攻修了。在学中、同声会賞、アカンサス音楽賞、大学院アカンサス音楽賞を受賞。聖徳大学大学院にてモーツァルトのレチタティーヴォ・セッコに関する論文で博士号(音楽)を取得。2013年から2016年にかけてオペラアカデミーinS.アマデウスに在籍し、秋山和慶指揮による公演などを2台ピアノで行う。2014年より兵庫県立芸術文化センターのオペラ公演(佐渡裕指揮)にコレペティトゥアとして携わる。新国立劇場ではピアニスト、副指揮者の両方で音楽スタッフとして携わる。あこがれシリーズでは《リタ》、《ドン・パスクアーレ》、《トスカ》などを指揮。近年は指揮者としての活動を広げており、オーケストラとの共演も行っている。二期会研修所講師、沖縄県立芸術大学非常勤講師。



●作曲家：



□アントニン・レオポルト・ドヴォルザーク
(Antonín Leopold Dvořák, 1841/09/08 - 1904/05/01)

後期ロマン派に位置するチェコの作曲家。ブラームスに才能を見いだされ、『スラヴ舞曲集』で一躍人気作曲家となった。スメタナとともにボヘミア楽派と呼ばれる。その後、アメリカに渡って音楽院院長として音楽教育に貢献する傍ら、ネイティブ・アメリカンの音楽や黒人霊歌を吸

収し、自身の作品に反映させている。代表作は、弦楽セレナード、管楽セレナード、ピアノ五重奏曲第2番、交響曲第7番、交響曲第8番、交響曲第9番『新世界より』、スラヴ舞曲集、この分野の代表作でもあるチェロ協奏曲、『アメリカ』の愛称で知られる弦楽四重奏曲第12番など。

□ヨハネス・ブラームス

(独：Johannes Brahms, 1833/05/7 - 1897/04/03)

ドイツの作曲家、ピアニスト、指揮者。J.S. バッハ(Bach)、ベートーヴェン(Beethoven)と共にドイツ音楽における三大Bとも称される。ハンブルクに生まれ、ウィーンに没する。作風は概してロマン派音楽に属するが、古典主義的な形式美を尊重する傾向も強い。代表作は、ハンガリー舞曲、交響曲第一番、ヴァイオリン協奏曲、子守唄など。



●演奏曲：

■『自然の中で』(V přírodě) 作品91(B168)

ドヴォルザーク作曲。演奏会用序曲の3部作『自然と人生と愛』(Příroda, Život a láska)の内の1曲。他の2曲は、『謝肉祭』(Karnaval) 作品92(B169)、『オセロ』(Othello) 作品93(B170)で、いずれも序曲とされている。3曲の中では『謝肉祭』がとりわけ有名ですが、今回は、普段あまり聞けない『自然の中で』をお楽しみください。

■『ハイドンの主題による変奏曲』(Variationen über ein Thema von Haydn)

ブラームスが1873年に作曲した変奏曲。《ハイドン変奏曲》の略称や、《聖アントニウスのコラルによる変奏曲》の別称でも親しまれている。

ブラームスは1870年に、友人でウィーン楽友協会の司書、カール・フェルディナント・ポールから、当時はフランツ・ヨーゼフ・ハイドンの作品とされていた『ディヴェルティメント Hob.II.46』の写譜を示された。その第2楽章は『聖アントニウスのコラル』と題されていた。ブラームスが変奏曲の主題に用いたのがこれである。近年の研究によって、ディヴェルティメントそのものがハイドン作でないか(イグナツ・プライエル作という説がある)、ディヴェルティメントがハイドン作であっても主題であるコラルはハイドン作のものではなく、古くからある賛美歌の旋律を引用したものと考えられているため、最近では『聖アントニウスのコラルによる変奏曲』と呼ぶ向きも見られるが、一般には『ハイドン変奏曲』との呼称が定着している。

○主題 Andante 変口長調

序奏はない。10小節単位の楽節構造が特徴的な主題で始まる。すべての変奏は、ほぼ例外なく、主題の楽節構造に従っている。和声構造については、あまり厳密に従ってはいない。各変奏ははっきりした性格づけがされ、いくつかの変奏は、古い時代の音楽形式や作曲技法が使われている。

○第1変奏 Poco piu animato 変口長調

弦が中心で、対位法的な進行を見せる。

○第2変奏 Piu vivace 変口短調

木管が付点リズムの特徴的なメロディを奏でる。

○第3変奏 Con moto 変口長調

やはり木管が中心だが、のびやかである。

○第4変奏 Andante con moto 変口短調

オーボエとホルンのゆったりしたメロディが、二重対位法で進行する。

○第5変奏 Vivace 変口長調

スケルツォ風の軽快な変奏。

○第6変奏 Vivace 変口長調

ピツィカートの上で、ホルンとファゴットがリズムカルにメロディを奏でる。

○第7変奏 Grazioso 変口長調

フルートの哀愁漂うメロディを、弦が引き継ぐ。

○第8変奏 Presto non troppo 変口短調

不気味に動き回る弱音弦の上に、木管が陰鬱な調べを乗せる。非常に不満足な形で終止して終曲に続く。

○終曲 Andante 変口長調

壮麗なパッサカリアで、これ自体がバッソ・オスティナートによる一種の変奏曲である。コラル主題を引き継いだ5小節単位のパッサカリア主題は19回変奏され、クライマックスでコラル主題が再呈示される

■交響曲第9番 ホ短調 作品95, B. 178

アントニン・ドヴォルザークが1893年に作曲した交響曲であり、ドヴォルザークが作曲した最後の交響曲。一般に『新世界より』(From the New World)の愛称で親しまれており、これは「新世界」のアメリカから故郷ボヘミアへ向けてのメッセージ、といった意味がある。

ドヴォルザークは1892年に、ニューヨークにあるナショナル・コンサーヴァトリー・オブ・ミュージック・オブ・アメリカ(ナショナル音楽院)の院長に招かれ、1895年4月までその職にあった。この3年間の在米中に、彼の後期の重要な作品が少なからず書かれており、「作品95」から「作品106」までがそれである。

この作品は『弦楽四重奏曲第12番 へ長調(アメリカ)』(作品96, B. 179)、『チェロ協奏曲 口短調』(作品104, B. 191)と並んで、ドヴォルザークのアメリカ時代を代表する作品である。

ドヴォルザークのほかの作品と比べても際立って親しみやすさにあふれるこの作品は、旋律が歌に編曲されたり、BGMとしてよく用いられたり、クラシック音楽有数の人気曲となっている。オーケストラの演奏会で最も頻繁に演奏されるレパートリーのひとつでもあり、日本においてはベートーヴェンの『交響曲第5番 八短調(運命)』、シューベルトの『交響曲第7番(旧第8番) 口短調(未完成)』と並んで「3大交響曲」と呼ばれることもある。